

## 谷川俊太郎の詩法

——『生』の意識と世界・他者・言語をめぐって——

佐藤洋一  
(国語教室)

## はじめに

詩集『二十億光年の孤独』(一九五二年)での三好達治の序文「この若者は／冬のさなかに永らく待たれたものとて／突忽としてはるかな国からやってきた」と評された谷川俊太郎の詩的な位置を、戦後詩史・現代詩史に位置づけたのは大岡信である。

大岡信は、大岡自身を含めた一九五〇年代詩人の特質を「感受性自体の最も厳密な自己表現」「感受性そのものを、手段であると同時に目的とする詩」ととらえ、その典型的な詩人として谷川をあげている。こうした「感受性そのものの祝祭としての詩」は、それ以前の世代である鮎川信夫・田村隆一等と対比され、谷川達の世代は「何よりもまず主題の時代であった『荒地』派や『列島』派に対するアンチテーゼとして出現した」(『戦後詩概説』)『現代詩大系』解説、一九六六―六七 年 思潮社)と語ったのである。

しかし、谷川の詩的世界は大岡の詩的以後、現在まで多様に展開し、いわゆる『荒地』派や『列島』派に対するアンチテーゼとしての「感受性そのものの祝祭としての詩」としての特質も具体的に十分明らかになっているとはいえないが現状である。例えば、一人っ子・学校嫌いといった生い立ちや環境・宇宙感覚(コスモロジー)と独特な孤独感・言葉遊びの世界・子ども語りの作品世界等、谷川を語る視点は多く提出されてきたが、これらの多くはいわば大岡の言うところの「主題」的な面からのみ論じられることが多く、谷川の詩的世界の全体像や詩法の系譜・作品の構図等を踏まえた、個々の作品のもつ谷川独自の詩的レトリック(詩の方法と文体)の考察等はきわめて不十分である。

本稿は、詩人谷川の現代詩史における位置や作品固有のレトリック・詩法の系譜等を明らかにするための基礎的考察として、詩の発想や方法意識の検討を中心に谷川の詩的世界の方法と全体像、詩風の構図を示すことにねらいがある。

## 1、詩的出発と一九五〇年代

谷川の詩的世界の構図を論ずる前に、戦後詩史の中で谷川俊太郎や大岡信をめぐる位置について簡単に確認しておきたい。大岡信は「四、感受性の祝祭の時代」(前掲書に同じ)の中で一九五〇年代詩人の世代的な特質について、次のように述べた。

詩というものを、感受性自体の最も厳密な自己表現として、つまり感受性そのものをてにをはのごときものとして自立させるといふこと、これがいわゆる一九五〇年代の詩人たちの担ったひとつの歴史的役割だったといえるだろう。それは、ある主題を表現するために書かれる詩、という文学的功利説を拒み、詩そのものが主題でありかつその全的表現であるところの、感受性の王国としての詩という概念を、作品そのものによって新たに提出した。その意味で、一九五〇年代の詩は、何よりもまず主題の時代であった『荒地』派や『列島』派に対するアンチテーゼとして出現した。(略)『權』『汜』『今日』その他の詩人たちから、一九五〇年代末期の『鰐』に至る、この時代の一群の詩人たちは、感受性そのものを、手段であると同時に目的とする詩、言いかえると、言葉の世界への一層深い潜入ということが詩の目的そのものでありうることを、彼らの詩そのものによって語っているような、そんな詩を書きつづけてきた。

なお、ここで取り上げられている一九五〇年代の詩人たちとは、川崎洋・茨木のり子・谷川俊太郎・岸田衿子・中江俊夫・水尾比呂志・吉野弘の大岡信等の詩誌『權』や、堀川正美・江森国友等の『汜』、飯島耕一・岩田宏等を含む『今日』、さらに安水稔和・嶋岡晨、入沢康夫等同世代の詩人をさしている。

それでは「ある主題を表現するために書かれる詩、という文学的功利説を拒み、詩そのものが主題でありかつその全的表現であるところの、感受性の王国として

の詩という概念を、作品そのものによって新たに提出した」これらの文学的世代に共通する感覚や意識の背景には、どのような時代認識や詩的方法があったのか。

### (1) 〈放心〉という「自己と他者との関係の証明」——一つの文学的世代の形成——

岩田宏は飯島耕一を論じた中で、一九五〇年代における「一九四四年の中学三年生」達の精神構造について「放心そのものを自己と他者との積極的な関係を証明するための手段と考えたことは、この世代の特徴であったと思われる」「ある世代に共通した疾患である貧血状態のなかで、新しいメタフィジックを創りだすこと。放心を理解にまで変質させること」(ユリイカ版「飯島耕一詩集」解説)と述べた。

大岡信はこうした指摘を五〇年代詩人の時代認識と文学的世代論として普遍化し、「彼らにとつては、個体は歴史の網の目によつても、政治の網の目によつても掬いとることのできない領域に、すくなくはみ出た、まっつたものとして、自覚されたのである。この自覚が岩田のいう『放心』の実体だったのだといつてよい」(前掲書)と語っている。一九三〇年前後に生まれた五〇年代人にとつては、満州事変(一九三一年九月)以降の日本軍国主義下に幼少年時代を送り、一九四五年の敗戦の時期には一三〜一四歳頃にあたる。

これは、鮎川信夫や田村隆一等「荒地」派や「列島」によつた詩人たちが、既に自己形成をある程度終えた時点で戦争に参加(出征)したり、戦場である抵抗を試みたり、友人の死と直接出会つた世代とは大きな差がある。彼らは戦争を觀念としてではなく、生々しい実体験として経験し、戦友の死をはじめとする夥しい死者の群れの中で偶然の重なりで生き残つた存在である。詩における国家・戦争の組織と個人の無力、文明の崩壊の危機感、組織や国家によつて解体された「人間性」の回復等のテーマ(主題)等は、いずれも体験を通じた文明批評の枠組みの中で、いかに戦後における「人間性」の全体的回復・詩的な創造をめざすが問われていた。

しかし、五〇年代の詩人たちにとつて、戦争という現実には知らないところで始まり、そして終わつていたのである。矛盾する諸価値の狭間に生きた彼らにとつて、日本の戦後の出発は同時に「世界」と「自己」の関係をどのようにとらえるかという本格的な自己形成の時期と重なつていたわけである。彼らの自意識の目覚めの時期は、矛盾するさまざまな価値観が騒然と共存する戦後日本の時期と重なり、それらの溢れる情報は「すでに信用ならないもの」であり、同時に「世界」に対して「イエス」といふべきか「ノーオ」といふべきか、その態度決定のための

材料を目前に何ひとつもたない存在としての自己を自覚していた」(前掲書)。

### (2) 〈貧血状態〉にある青春の肖像——という詩的方法

歴史や政治の網の目によつても掬いとることのできない領域に既にはみ出してしまつたと「自己」を自覚した青年が、「自己」と「世界」を捉えようとする時まず行われたのは、彼らの内面にシンボルとして歴史や政治を超えてひろがる「あの空や、土や、太陽」(勤労動員の思春期の中学生がみた自然や世界)を「言葉」の世界によつてたぐりよせ、「自己」自身を対象化することであつた。

その時、信じるに値する唯一のものとしての「感受性」を武器に、既成の詩で使われているような生硬で観念的な言葉に頼ることなく、対象化された自己を「言葉(イメージ)」の世界に返してやるがこの世代に一斉に獲得した「唯一の詩的方法」であつた。

大岡は、こうした自己と世界の「関係」の発見・創造の一例として「他人の空」(飯島耕一)をあげているが、それは言い換えれば詩人個々の「感受性」による詩的な方法によつて「貧血状態」にある青春の肖像を描くことであつた。これは詩人によつては「個人的な神話」「自家製の神話」を創ることもであり(例えば、「恋愛」という関係による他者理解)、「超現実」的なイメージや感覚によつて「見えないものを見る」という発想になつたり、「世界(外部)」との関係の発見や願望を共生や喪失感覚等(宇宙感覚やシュールレアリスティックな表現等)という形で描くこともあつた。

### (3) 〈分裂した自己〉の統一と詩的創造への希求

「言葉」による自己と世界の関係の創造という詩的行為は、「感受性の祝祭」としての詩的世界の創造というこの世代には、「荒地」「列島」等の詩人たちとは異なる形で「言葉」(認識・詩的な世界)と「行為」(現実・事実)の葛藤を引き起こすことになる。自己と世界の関係は結局、言葉の世界の中でしか実現されないという事実は、「即自」と「対自」に分裂した自己自身の統一をめぐる、言葉に対する信と不信の葛藤のテーマへ、そして分裂した自己(感受性)の存在を行為や時代・歴史の中でどのように描くかといった課題に向き合わせるようになる。

ところで、大岡信は五〇年代詩人に求められるべき使命(役割)について「意識下の領域」の言語的組織化の時代的重要性を強調し、次のように述べている。「詩人の質を決定する大きな要素は(略)彼の意識下の部分の質如何にある」とし、「読者の意識下に漠然と可能性のままにわだかまっている感性を、詩の言葉の

組織的な構造を通じて組織化し、ぼんやりみれば何の意味をも啓示しないものの中に深い感動の源泉を見出しうる能力を育てていくことが必要なのだ。ぼくらと他者との関係の新たな様式を生み出していくことが必要なのだ。「詩の必要」一九五四年一月、「今日三号」。

現代における詩のありかたを「意識下の領域（無意識や感覚）」の組織的言語化によって「他者（世界・外部）」との関係を創造的に描くという立場、観念・リズム・形象・音の総体として「存在と存在との関係の新たな様式」の探究ととらえる視点は、大岡の批評的文脈の中ではモダンリズム詩運動等における日本のシュールレアリスムの批評につながるものであり、同時に五〇年代以降の大岡自身の詩的方法を語っているものである。

しかし、こうした指摘は単に大岡個人の的方法意識のレベルを超えて、それ以前の詩人とは異なる五〇年代詩人の言語観・詩の構成論、詩人の時代的な役割等の主張をも語っていると読むことができる。

## 2、谷川の詩の発想——詩の方法意識の検討から——

過去の歴史や政治・国家（世界）から「すではみ出してしまったものとして自覚された」自己の発見と創造（回復）というテーマを、「自己と他者（世界）」との関係の証明」の手段として語る時、世代的な特徴とともに当然、詩人固有の詩的発想や方法意識の問題がある。

谷川俊太郎は自己と「世界（外部）」の関係の発見をどのように意識し、詩的方法としていったのか。谷川の詩的な発想を彼の語る言葉の中から、ここでは谷川の詩の構図と方法を考えるところから、四項目に整理して特徴をまとめてみたい。

### (1) 生と言葉の関係への執着——生と関係（存在様式）の探究——

谷川にあつては、詩人であること・詩を書くことは自己の「生と言葉の関係」の発見であり、それは現代人（一九五〇年代）における「生活と生の大きな不一致／離反」というジレンマを詩人が自己の課題として引き受けることによつて人々の中で結び付けることであるという詩観（認識）が極めて顕著である。

こうした詩観がエッセーとして繰り返され書かれるのは「世界へ！」（一九五六年）を初めとする文章によつてである。例えば、次のような言い方である。

詩において、私が本当に問題にしているのは、必ずしも詩ではないのだという一見奇妙な確信を、私はずっと持ち続けてきた。私にとつて本当に問題

なのは、生と言葉の関係なのだ。（略）念のために言うが、私は決してけちな自己表現のために、言葉を探すのではない。人々との唯一のつながりの途として言葉を探すのである。

（傍線は佐藤、以下同じ。「私にとつての必要な逸脱」一九五六年）

あらゆる人間は、常に何ものかを通して、生き続けてゆこうとしているのである。詩人もその例外ではない。彼は詩を通して生き続けてゆこうとしているのであつて、決して詩そのものを求めて生きていくのではない。我々は詩を書くために生きていくのではない。生きていくために、あるいは、生きていくから詩を書くのである。私は詩には惚れていないが、世界には惚れている。私が言葉をつかまえることの出来るのは、私が言葉を追う故ではない。私が世界を追う故である。私は何故世界を追うのか、何故なら私は生きていく。

（「世界へ！」一九五六年）

「生」の探究と、「言葉」による世界との（関係（自己の生と生活・他者と詩人のつながり等）の発見という詩観は、具体的な詩集とのつながりから言えば第三詩集『愛について』（一九五五年）のモチーフや方法等と深い関連があるが、単に時期的な認識にとどまらず、谷川の詩法や詩の構図の基本的な枠組みを構成しているものと見ることが出来る。

### (2) 「世界」との一体感と「孤独」——独特なコスモロジー——

谷川独特の宇宙感覚（コスモロジー）・世界との肯定的な一体感、その中で語られる清新な孤独感や喪失感覚は、第一詩集『二十億光年の孤独』（一九五二年）で鮮明に描かれている。その後、離婚や安保闘争等個人的・社会的な背景の中で、詩法は様々に変奏していくが、自己の「生」や日常・青春を「世界」との連帯や一体感として捉える人間把握の方法や態度、孤独や喪失といった伝統的なテーマを非感傷的に幾何学的な清潔さで描いていく方法は、彼の詩的発想の基盤であつたといふことができる。

世界とむすばれているという意識、世界とのこの連帯感、それらがぼくらを生かす。ぼくらの生の意識、それは人間の間だけで全くなるものではない。ある時には非人間的なものが人を生かす。われわれが生命である以上、われわれは物質であり、われわれは星々と同じ生まれなのである。

（「世界へ！」一九五六年）

このような自己の「生」と、「世界」／未来に対する無条件な肯定的な眼差しに、いわゆる人間関係の地獄を経験しない恵まれた青年の育ちのよさを見ることが出来る。

きるし（清岡卓行『抒情の前線』一九七〇年）、思想家谷川徹三の一人息子・恵まれた環境と生い立ち・学校嫌い・短波ラジオを作る等事物や器械のメカニズムに惹かれる性格等を指摘することも可能である。

例えば、父谷川徹三の「コスモスの感覚」についての質問に答えて、谷川は「人間の社会も宇宙の部分として含んでしまおうような大きな宇宙」であると語り、次のような青年期の体験を語っている。

コスモスというふうなものを感じ取れたのは、青年のころ、この北軽井沢の自然の中にいたからだと思う（略）十代の終りから二十代の初めにかけて、自分が自然というものと一体になっちゃっているような状態、一体になっただけで完全だったような状態があったんですよ。そのばあいは、自然というふうな言葉で人間と対立したものとしてみてもとらえるよりも、コスモスという言葉で自分と自然を全部ひっくるめてとらえたいという気持ちがありましたね。無機物から進化してきた人間の命も、地球という星も、空に散らばっている他の星も、全部むすばれているという一種の汎神論みたいなものがあった。

〔対談〕一九六一年

また、他者・世界との〈関係〉の認識に、ローレンスの影響があったこともしばしば述べていることである。

D・H・ローレンスの「アポカリプス論」、〈現代人は愛し得るか〉という題名で邦訳されていたその本が、当時の私の聖書でした。私はいつも、女のむこうに樹々を見、空を見、人々を見ていました。そして私は、いつも自分がそれを愛せるのかどうかとおそれていました。

〔愛のパンセ』一九八一年）

谷川における「生」の意識と「世界（外部）」の把握、その関係の表現には、従来とは異なる新しい「人類的な孤独観」「人類意識」の表現と人間把握の表現（大岡信『空の青さをみつめている』谷川俊太郎詩集Ⅰ『角川文庫、一九九六年改版）、独特な清新な叙情を見ることができると、そして、それは単に谷川に限らず、戦後に詩作を始めた詩人にある程度共通した敗戦後の日本の国家（国民）意識の希薄化という点と微妙な関係があったということも重要である。

### (3) 言語的無意識と日本語（詩）の可能性——非主体・周辺の詩——

谷川の詩の方法である言葉遊び・わらべうた・数え歌等のジャンルは、言語の意識と無意識（リズム・意味・伝統等）を生かして日本語における豊かさや多面

性を拡大したものとして重要な意味がある。

例えば、「ことばあそび」の詩を書く発想に、現代詩に欠落している「韻文性の回復」があったこと、そして童歌のような伝統的な「詠み人知らず」（匿名の非私性・日常的な人々）の詩とリズムの中に「詩の源」あること等について、次のように述べている。

どれくらいしつこく韻をふめば日本人の耳に聞こえて、それがおもしろいだろうかということが、僕の「ことばあそび」の発想の一番初めだったんです。そして、一番はじめに書いたのが「はなののはな／はなのなな／はなのなな／はなのなな／はなのなな／はなのなな」これは幼稚園関係の機関誌に出したんだけど、当時は発表できないと言われたのね。（略）日本の現代詩に欠けている韻文性をどう回復しようかというのが、この詩を書いた意図だったわけです。そのことは同時に、光太郎とか朔太郎とか日本の現代詩の天才達が富士山の頂上だとすると、詩には裾野もあるということですね。（略）例えば民間伝承の詩とかそういうものですね。日本の例で言えば、わらべうたのようなもの、そういうところにも詩の源があって、僕自身どうにかしてそういうものを書きたいと考え続けていたってこともあるんです。僕はマザーグースを翻訳していく過程で、そういう「詠み人知らず」というような普通の人のなかから出てきた詩みたいなのを書きたいという欲望があって、そういうことも、この「ことばあそび」と結びついているんですね。だから、この詩の位置は天才達の書いた詩や現代詩とは全然違うところにある。それは、地理的なことで言うと、裾野のほうにある。中心よりも縁のほうにある、縁のほうにあるからこそ大切である。

〔現代詩入門』一九八五年）

特に、「詠み人知らず」のような普通の人々の生活から出てきた言葉（詩）を周辺だからこそ逆に重要であるとする考え方は、(1)で述べたように、詩を書くことは自己の「生と言葉の関係」の発見であり、「人々との唯一のつながりの途として言葉を探す」という詩観ともつながっている点である。

また、近代以降、作者の思想や批評性の確保（私性）の固有性と普遍性という詩の方法の強調によって切り捨てられてきた、もう一つの別な側面の重要性について、詩的発期の戦後派の詩人の態度との比較で次のように語っている。

一般的に言うところ、われわれが発見したところの戦後詩というのは、非常にはっきりと韻文性みたいなものを拒否していたところがあると思うのね。（略）その詩の内蔵する世界の大きさ、あるいはその作者が抱いている考え、大きさに言おうと意味みたいなものがまず問題であって、ことばの持っている一種

の身体性、言い換えれば音の側面みたいなものは切り捨てよう。むしろそういうものを切り捨てないと、詩のもっている思想性とか批評性が明らかにならないという考えが、どうも大勢だったような気がする。

〔詩の授業〕一九八八年

つまり、戦後詩の大きな流れは「詩における韻文性・身体性」の拒否による「意味・批評性・思想」重視であったが、その行き過ぎによって狭くなった詩／言葉の世界の豊かさや多面性を、言葉遊び歌等によって「音」の側面（韻文性）・身体性から回復させたいと述べている。

別の部分では、詩における自己表現の固有性とは対局にある「ことばあそび」の詩作によって、逆に「言葉の富」（日本語の意識と無意識の可能性）を獲得し、日本語の表現の幅や魅力を拡大できる点について語っている。

最近やっている詩の書き方の一つに「ことばあそびうた」という、語呂あわせのみたないのがある。これはまず非常に短い語呂みtainのを思いついたら、あとは音韻的にそれとおもしろく組み合わせられる言葉をスキヤニングするわけね。音の似ている言葉を辞書を繰って探したり、頭のなかで一瞬懸命思い出すこともあるけれども、五十音図で順列組合せをつくっていくという、ほとんど手仕事に近いようなこともやっているんだよ。（略）これは僕にとってはわりあい新しい詩の書き方なんだ。（略）「ことばあそび」の場合には、むしろそういう書き方をする中で自己表現からまったく自由になれて、言葉のなかに身を浸すというか、言葉の富をアノニムに自分のものにしていくことができるような感じがするんだ。

〔詩の誕生〕一九七三年

谷川の詩風（ジャンル）の大きな特色である言葉遊びの世界は、単に才能ある詩人による言葉遊びの楽しい詩の提出というだけではなく、現代における日本語（言語）の新たな探究という意味がある。それは、一つには「声」という個性的な肉性によって発せられることによる言葉（詩）の身体性・リズム（音楽性）の回復であり、二つ目は伝統的なリズムや発想（日本的な「集合的無意識」）を生かしているという点で日本語の「伝統の再創造（発見）」であり、さらには「個」としての主張の固有性（私性）の限らない消去を特色としているという点で近代以降の詩と詩の方法の欠落を日本語論の側面からも補うという面がみられるのである。しかも、これらは谷川の詩による「生」（生活・日常）の探究、戦後・現代詩の表現の可能性の拡大という詩作態度ともつながっている点が重要である。

(4) 自己への帰還―日常性・他者の再発見―  
年齢の成熟とともに谷川の詩風も変化をみせるが、大きな転機となったのはとりわけ父母の死という経験である。

「父の死」というのがそのひとつの終わりであり始まりのようなものですけれども、自分の家で母がボケたりして、いわゆる老人問題が出てきて、結婚生活が破綻してしまう。（略）そういう流れのなかで（佐野洋子氏から受けた大きな影響や批判にどう答えるかということ・佐藤注）自分の外側にいる人間を主人公として詩を書こうとしていたんだけど、「父の死」あたりからできるだけ正直に自分を描くということに自覚的になりました。もうひとつは父親に対して遠慮もあつたかもしれない。死んだ時に一種の解放感が生まれ、つまりこれでいくら父に恥をかかせてもいいんだというようにふっきれて、これからは本音で書こうと思いました。

（いま、谷川俊太郎を読む）『現代詩手帖』一九九三年七月号  
またこの後、佐野洋子氏の影響を受け「女（という他者）の視点」から自己の人間関係の無知を見直すという点にも自覚的になり、それが詩集『世間知らズ』につながったことにも触れている。

ここで注目したいのは、父母の死を一つの契機に自己の「生」や日常を見つめる視点に変化してきたことである。自己の「生」と「世界」の関係を表現するという方法は、初期から一貫したものが、離婚や佐野洋子氏との出会い等も含めて、この時期、「世界」としての他者（自分の外側の人間）や「社会（世間）」等を語る方法がより直截になり、同時に「正直に自分を描く」ことで人生の認識を描くことに自覚的になる。

### 3、谷川の詩の詩法と構図

谷川俊太郎の詩の発想や詩的な方法意識の多面性は、もちろん「2、谷川の詩の発想」で述べたような四項目にまとめられるほど単純ではない。他に、「関係」の発見（「他者」の両義性）・マスメディアの中の詩人像（現代における詩と詩人の位置）等、谷川の詩を構成している重要な要素を見逃すことはできない。また、ここで示した四要素にしても、初期から中期、後期へと詩風の変遷の中で、また各詩集の中でそれぞれ重なり変奏されているからである。しかし、こうした取り上げ方によって谷川俊太郎の詩の発想と基盤となっている構図や詩観の全体像がある程度鮮明になると思われる。

ところで、「1、詩的出発と一九五〇年代」で述べたように、谷川や大岡信達五

○年代詩人は戦争経験の世代的相違を背景に、それ以前の世代の詩人達の詩の方法に対するアンチテーゼとして登場したわけだが、このことは両者の詩風の骨格に大きな断絶とも言うべきものをもたらしている。

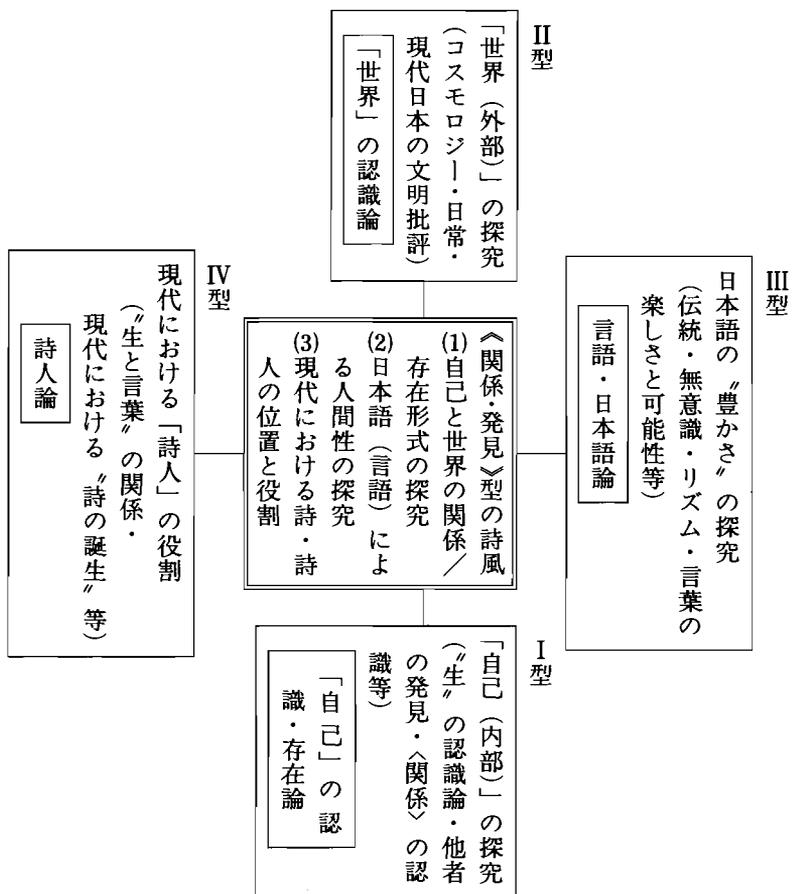
既に自己形成を終えた時期に戦争に参加した鮎川・田村・中桐等の世代は、戦争を観念としてではなく生々しい実体験として経験し、夥しい死者の群れの中で偶然生き残り帰還した存在である。彼らにとって詩を書く行為とは、戦争による文明崩壊の危機感を背景に、組織や国家によって解体された「人間性」の回復等のテーマ(主題)を体験を通して文明批評の枠組みのなかで語ることであった。

彼らの詩に頻出する「死」の描写や戦場の日常は、既成の価値観や思想の虚妄性、グロテスクさ、国家による支配の不合理性等を批評する表現装置として選ばれており、そこでは観念や自己の思想が戦争との出会いを通して解体/崩壊する過程が自己の「生」の真実と批評として、悲劇的な構成で描かれることが多かった。

しかし、戦後日本の出発が本格的な自己形成の時期と重なっていた五〇年代の詩人たちにとっては、少年期の過去の記憶や喪失感といった曖昧な存在感覚を基礎に自己の「生」の意味と「世界(他者・外部)」との関係を新たに発見し、創造していくことであった。これは、既成の価値観や秩序が悲劇的な解体/崩壊過程として描かれることで自己と世界の間を語るという方法とは発想が異なるものである。

谷川の場合も同様であるが、詩を書くことは自己の「生と言葉の関係」の発見であり、人々との「関係(つながり)」の意味を探究することであると繰り返されている点、つまり言葉による世界との「関係」の発見という詩観という構図に谷川も含めた五〇年代詩人の一つの大きな特質があり、自己探究は自分探し/他者との「関係」の亀裂(孤独)等の感覚として描かれることになる。

このように考えると、五〇年代詩人、特に谷川の詩の発想の中心に「〈関係発見〉型の詩法(詩風)」とも名づけられる方法意識を位置づけることで、その詩風の個性や特質が分かりやすくなるように思われる。次の図は、「〈関係発見〉型の詩法(詩風)」を中核に、谷川の詩風の特質を整理したものである。



I型は、いわゆる伝統的な詩のテーマである自分は何者か? 人生の意味とは何か? といった「自己(内部)」の探究の詩風である。「生」の認識論・他者の発見・〈関係〉の認識等が「世界」との関係の中で、あるいは子どもが語りの作品・ことばあそび等の詩風の作品の中で描かれる。

II型は「世界(外部)」の探究の詩風であり、谷川独特なコスモロジー(宇宙感覚)・日常の再発見や現代日本の文明批評が語られる作品群である。戦争を体験した戦後詩の方法にあつては、個人や日常の細部も国家や制度の支配/非支配の関係にあるという構図が共通の認識である。政治や国家・戦争等具体的な表現がはつきりと表されない作品にあつても、背後には個人と国家の構図や詩人の批評精神の眼差しを読み取ることが可能である。メタフィジックな宇宙感覚や自然の描写は、いわば反転した個人的な批評空間として設定されていると読むことが重要な

のである。

III型は思考の形式としての言語／日本語の『豊かさ』や可能性の探究の詩風である。数え歌・童歌・言葉遊び等の作品を通して、伝統や言語的無意識、リズム・言葉（詩）の魅力の可能性が描かれている（詳細は「2、谷川の詩の発想／(3)言語的無意識と日本語（詩）の可能性—非主体・周辺の詩—」参照）。

IV型は現代における「詩人」の役割と意味についての認識が語られる詩風である。現代における『生と言葉』の関係をどのように捉えるのか、詩人であることは何を意味するのかといったテーマは「世界へ！」という初期のエッセイ以来一貫して繰り返されてきた谷川の課題である。例えば、「本当のことを言おうか／詩人のふりはしているが／私は詩人ではない」「鳥羽」の二連（詩集『旅』一九九五年）という形で現代における言葉そのものの力（詩の機能、詩人の役割）のありかた等を語る場合もある。

#### 4、三つのテーマと詩法

先の詩法と詩風の構図を踏まえ、重なりやバリエーションは当然あるものの巨視的に谷川の詩のテーマと方法をまとめると、おおよそ次の三つに整理することができる。それは、(1)『生』の讃歌の系譜、(2)「日本語（言語）」の探究の系譜、(3)「人生（生）」の認識の系譜と名づけることができる。以下、要点を簡単に説明することにした。

##### (1)『生』の讃歌の系譜

「『生』の讃歌の系譜」とは、いわゆる「いのちのほめうた」の系譜であり人間・関係の「発見」、つまり「世界（外部）」と「自己」の関係を語るものである。自己の身体や存在感覚と「世界」の関係のありかた、例えば自然や宇宙との一体感の感覚やそのズレ（孤独やかなしみ、喪失感覚等の違和感）を語る詩風の系譜のことである。

具体的には、初期の詩集である『二十億光年の孤独』（一九五二年）、『六十二のソネット』『愛について』（ともに一九五五年）等が中心であるが、初期から現在まで一貫してみられる詩風であり、谷川の詩風の中核が肯定的な形をとって作品化されたものが多い。『六十二のソネット』は詩集全体がそうした構造になっている作品群である。

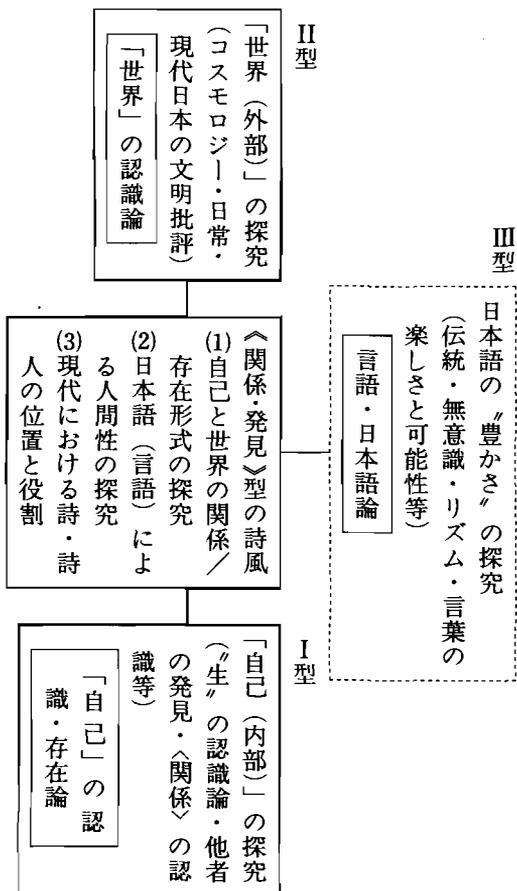
『六十二のソネット』全体は、大きっぱにいえば、ひとつの生命的なほめうたである。私の肉体は、一生のうちの最も輝かしい時期にあり、私の感受

性は世界のすべてに向かつて最も官能的に開かれていた。私は自らが死すべきものであることを感じつつ、正にそれ故に、今のこの生の喜びと悲しみの瞬間において、自分が不死であることを信じていた。

（「世界へ！」一九五六年）

また、子どもの語りによる詩や身体（肉体）・存在の肯定的な表現の作品等もこれにあたる。例えば「おならうた」「うんこ」等は子どもの語り（子どもの視点）を通して日常的にはタブーとされている話題を取り上げ、生きていること（生・身体）の肯定をユーモラスに描いている作品である。この詩風には、比重の置き方によって『生』の肯定的な認識や「世界」との一体感が語られる詩と、そうした一体感や肯定的な認識とズレた存在感覚を喪失感覚や孤独感として描く詩の系譜がある。

『生』の肯定・讃歌  
 ↓  
 喪失感・孤独感という存在  
 感覚  
 ↑  
 「世界」との一体感  
 谷川独特の世界感覚・コスモロジー  
 ↓  
 これらのことを図式的に示せば、次のようになる。

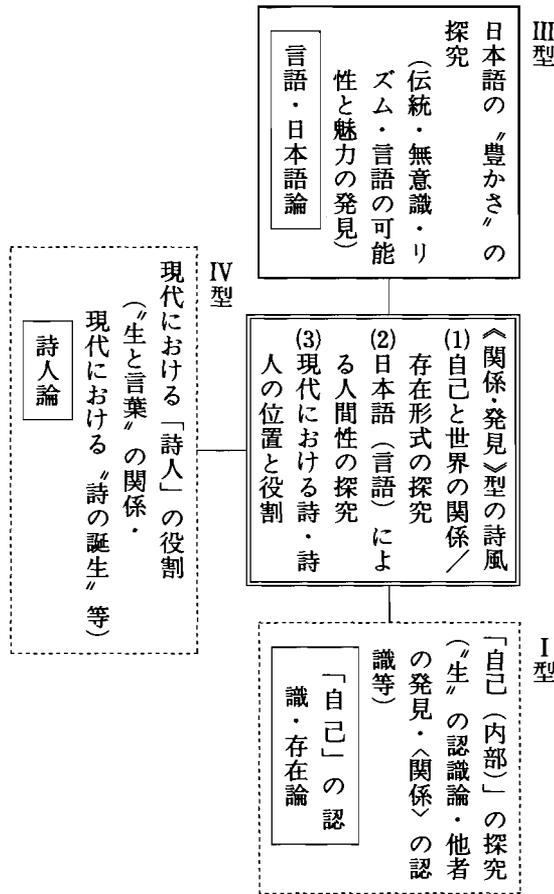


##### (2)「日本語（言語）」の探究の系譜

「日本語（言語）」の探究の系譜とは、言語（日本語）における「集合的無意識」

を生かした豊かな日本語の世界の探究の詩の系譜のことである。谷川の詩の世界には、わらべうた・かぞえうた・言葉遊び等の日本語の詩歌の伝統を生かした谷川の展開の世界が詩風の一つとしてあること、その現代詩的・言語論的な意義等についても、先にも述べた。

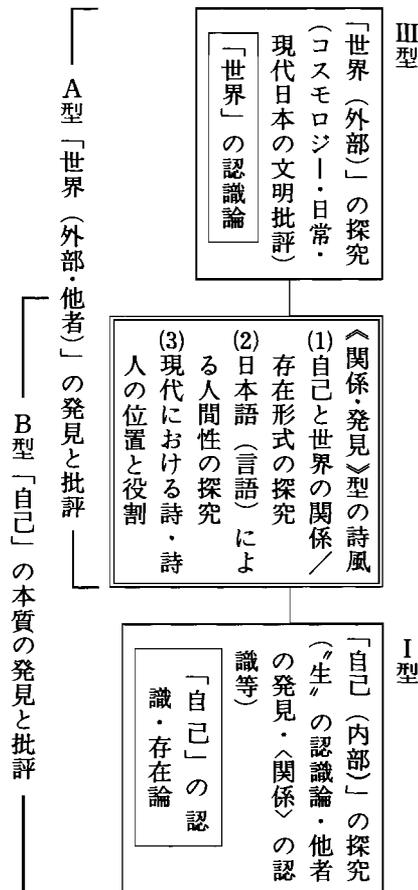
これは要するに、日本語の「発見」・意味とリズム・伝統的感性（無意識）等を生かして、いわゆる「日本人・日本語の探究」を行っている詩の系譜と読むことができる詩風である。「マザーグース」の翻訳（一九七五年）『ことばあそび』（一九七三年）『わらべうた』（一九八一年）『ことばあそびうた』また（一九八二年）等の作品を発表している。また、こうしたテーマをもつ子ども語りを通しての作品も多い。図式的に示すと、次のようになるだろう。



(3)「人生(生)」の認識の系譜  
「人生(生)」の認識の系譜とは、「生」「人生」や「世界(外部・他者)」についての存在論的な詩風の系譜のことである。「自己」と「世界(外部・他者)」の存在形式や関係についての「〈関係・発見〉型」の詩風を中核に据えた場合、二つの詩風を見ることが出来る。

一つは「世界(外部・他者)」の探究や批評が「世界(他者)」の認識論として

強調され、そちらに比重がある作品の傾向(A型)と、もう一つは「自己」の「生」の本質や意味を自己探究の形で語られている作品の傾向(B型)である。図式的に示せば、次のようになる。



A型「世界(外部・他者)」の発見と批評は、「世界」を言葉でどのように捉えるかといった試み(詩集『定義』一九七五年)や高度経済成長下の日本への批評(詩集『落首九十九』一九六四年)等、世界と日常性の構造や無意識の探究の詩風の商品である。例えば、詩集『定義』は意識的な詩の実験的作品であると述べ、非常に正確な散文というものを念頭に於いて、一つのを定義するといふ気持ちで書きはじめた散文詩の一群れ。(略)正確に突きつめれば突きつめるほど滑稽になってくるみたいなの、そういう形で言葉に裏切られたともいえるし、逆にそういう具合に言葉を広げることができたともいえるものだ。

(大岡信との対談、『詩の誕生』一九七三年)

と語っている。これは言葉による「世界」の認識の実験的な方法であり、「世界」への名づけをめぐる言語の探究という側面をもっている。この詩集の特質について北川透氏は様々な試みがなされているので一つの理解に収斂するのは危険だがと断りながら「もの」とことばとの既成の関係を解体し、最初にものをことばで名づける、ある不安で魅惑に満ちた関係を取りもどそうとする方法がある」と「自由で不安に満ちたものをめぐることは運動の過程の記述、それ自体がめざされた」と語っている(『朝のかたち 谷川俊太郎詩集II』一九八五年、角川文庫)。B型「自己」の本質の発見と批評は、先に示した「生」の讃歌の系譜」の中の

子ども・女・父母／世界（外部社会）という他者との「関係」が語られ、そこから見えてくる自己の存在感覚（生の本質や人生の意味）に焦点化されている詩風の作品である。他者による自己の再発見の詩風と言いつてもいいだろう。

詩集としては例えば、『メランコリーの川下り』（一九八八年）『日々の地図』（一九八二年）『女』（一九九一年）『世間知らズ』（一九九三年）『真っ白でいるよりも』（一九九五年）『モーツァルトを聴く人』（一九九五年）等、一九八〇年代以降の作品に多い。

### おわりに

本稿では、谷川俊太郎における詩的出発を一九五〇年代詩人の時代認識や共通した喪失感覚（貧血状態の青春）、すなわち歴史や政治の網の目でも掬い取ることのできない領域にまで既にはみ出してしまっている自己の自覚の問題を、前の世代である「荒地」派や「列島」グループの詩法との相違から捉え、谷川独自の詩的発想や方法の構図の全体像を鮮明にしようとしたものである。

「放心」を新しいメタフィジックという詩的表現にまで変質させること（岩田宏）は、谷川にあつては「世界」と「自己」との「関係」を発見する形で自己の「生」の存在様式を描いていくという詩的発想が中核にあることが重要である。具体的には、「世界（コスモス）」との肯定的な一体感と自己の「生」の探究の中で、世界・他者・言語・時代（文明批評）等多面的な展開を見せている。

戦争の狂気を経験した戦後日本の国家意識の希薄さ、文明崩壊の危機感、言葉による「生」の全体性の回復への願いは、谷川の中では伝統的な人生の認識と諸相を描くという詩法の他に、感傷的な存在感覚の把握からは遠い澄んだ幾何学的な独自の孤独感や存在感覚の表現（宇宙感覚の孤独観）、「世界（外部・他者）」との「関係」の新しい把握の方法（生の讃歌）等として展開している。

とりわけ、言葉遊びや童歌・数え歌等の非私的な作品は、現代的な自己表現（作者の思想や批評の固有性）から離れることによって逆に日本語の（近現代詩の）世界が失ってきた日本語（言語）の豊かな可能性とひろがりを示すものであり、これは谷川の「生と言葉の関係」を重視する詩観の一貫した詩風の表現でもある。

本稿で示した詩法のモデルで谷川の全ての作品を解明することが出来るわけではないが、これらを手掛かりにすることで、例えばこれまで部分的断片的にしか論じられなかった言葉遊びの詩と人生の認識を語る詩の関連、自己の生の探究の作品が初期からどのように変遷してきたのか、谷川の独自の自覚性、各詩風の作品の関わりと位置が明らかになり、同時にいわゆる戦後詩との違い等詩史的な

位置づけもより明らかにするステップとしての意味が重要である。

なお、初期から現在までの詩風の変遷についてや各作品を取り上げての詩的レトリックや詩風との関係等についての詳細は別稿を期したい。

### 〈付記〉

本稿は「谷川俊太郎の詩法―関係・発見―型の現代文学の行方」（『愛知淑徳大学ウィークエンドカレッジ・一九九八年七月一日（土）』での講義の一部をまとめたものである。

なお、谷川俊太郎の言語論・構成論・レトリック論等について具体的に作品を取り上げて検討した拙稿に次のものがある。「谷川俊太郎詩の言語技術教育―「かなしみ」「川」「おとうさん」等を中心に―」（『沼口勝先生還暦記念文集』（一九九七年一〇月、邦文社）。

（平成10年9月11日 受理）